

貴溪

崇安

大廟

40m 33°

550 12行の

520°

探生 精進

550 3行

557°

改行

小林 589° 1955

改行

2018°

552° 10行

大工 2011 製

太伯

仲雍の時代

の崖墓

もう一度、話を、太伯の時代へ戻すことに

よう。

一九七八年、福建省崇安縣城から西南約一

五kmにある太廟村で、武夷山中にある多くの

崖墓の一つが調査された。

崖墓は、溪谷に面する断崖に自然にできた

洞窟を利用してつくられている。

今回学術調査された洞窟は、谷底から五メートル

の高さにあり、西壁の頂点に近いうところにあった

洞窟そのものは高さが一・五メートル、最も

幅の広いところで六・八メートル、奥行は五メートル

底部に石が敷かれ、その上に楠製の船形木

棺が置かれていた。

棺の中には五十歳後半の男性一人が頭を洞

のほうへ向けて葬られていた。棺内には遺

体のほかに、亀状のかたちをいた木製の盤

紡織品の残片、遺体をのせるための竹製の席

と下に置く棒、シユ口の繊維があり、棺外に

物をのせる平たい台

あるいは6行 1982 殷前16世紀 前1518年
 倭人伝と読む 911行 武進高校地図 558p
 552 崖墓の年代
 「倭人伝を読む」90p
 645p

は、供物と思われ、豚の下頤骨(下あごの骨)があった。
 この墓の出土品で注目されるのは紡織品で、
 もとは遺体に着せてあったものと思われる。
 上海紡織科学研究所の鑑定によると、
 褐色と黄土色をいた平織、絹の茶色をいた平織、
 平織、絹の茶色をいた平織、木綿の青灰色
 をいた平織であった。
 この墓の年代は、木製盤の放射性同位炭素
 による測定の結果、いまから約三五〇〇年前
 と出た。
 また、この崖墓内に置かれていた楠製の船
 形木棺は、呉国・太湖北岸の地、江蘇省武進
 県奄城の城内河から出土した二隻の楠製の船
 とつながりがあるかという。(「倭人伝を読む」
 中公文庫、八七、九〇、九一頁
 昭和五十七年発行)

参照
 今から約三五〇〇年前(前一五
 〇〇頃)といえ、殷末の時代である。
 あるいは、前一五〇〇年前後の巨木から、

645p
 大カンフ 2439p
 頤骨
 「あごの骨」
 下あごの骨

⑤535P

天つぎ
改行

改行

同文
⑤535P

559P

同文
⑤535P

⑤557P 6行

改行

⑤557P
-1/3
18行

この亀状の形を^{かめいよう}した盤^{ばん}が作^{つく}られたので^{はな}ろう
か。そ^そうしてこの崖墓^{がいぼ}は^{前二〇年頃}の^{仲雍}の時代、
もしくは数代後の者達によ^もって営^{えい}まれたのか
も知^しれな^ない。

この物語では、
福建省太廟村の崖墓^{がいぼ}は、太伯^{たいはく}もしくは太伯^{たいはく}に
つらなる者の墓^{はか}であ^あったろう
と仮定^{かてい}して、話を進^{すす}めてみたい。

なお、先^{さき}述^{しよ}べた^たように、^{宜侯矢簋}とよ
ばれる銅器^{どうき}が江蘇省丹徒県の揚子江左岸の
^{宜侯矢簋}とよばれる

台地^{だいち}から出^い土^どした銅器^{どうき}の銘文^{めいぶん}には、^{周軍}
が揚子江の南^{みなみ}まで進軍^{しんぐん}したとあり、
これ^{これ}でおり、さらにまた別の銘文^{めいぶん}には、^{成王}

が武王^{ぶおう}（周初代）の后^{きさき}の王姜^{きやう}（成王^{せいおう}の后^{きさき}とも
いわれる）とともに遠征^{えんせい}して、南方^{なんほう}の楚^し国^{こく}
攻路^{こうろ}したと述^{しよ}べている。^{揚子江中流の国}

すなわち、^{中流域}の地^ちにまでも進軍^{しんぐん}していたと
いう事実^{じじつ}がわかつたという。（「中国のあけぼ

の」貝塚茂樹、河出書房、一二五頁参照。第

前頁119
 「つたひりかあうかう」
 558P 418.3月 558P 560P-2/2
 532P
 同文 538P-1/2 末3行へ 529P 8行
 受の君主

と記されているのだから、
 周章うはそーい12.5km
 実ほよほど辺鄙な所に住み
 その地を日吳国と稱していたのだらうと思われ。

吳国の前は、
 当初、揚子江の南岸、太湖東岸の蘇州に近

い梅里（今の江蘇省無錫県東南）の地にあり
 寿夢の次の諸樊（前五六一―前五四八）の
 時、吳（江蘇省吳県、今の蘇州）へ移され

た、
 という。（第六章へ吳国の台頭✓の項におい

て既述）
 恐らく、都の近くに広がる太湖は、吳国の
 人々にこよなく愛され、交通手段としても欠

かせない大切な存在であつたらう、と思われ

る。
 人々は、楠の船に乗って、太湖北岸などに
 漕ぎ渡っていったに違いない。
 こうしたわけで、楠製船形木棺

へ武夷山中の崖墓内の楠の船と、太湖北岸
 から出土した楠の二隻の船との間に、類似性

＊

どうもか

561^P-1/10

542^P-1/2
542^P-3/2
1/2 17年

改行

だが、前四七三年、
呉は越に
夫差が自らの命を絶って、呉国は滅んだ。
うか
太伯の後と称する者を擁した誇り高き呉国
の重臣達は、国を奪われ、非憤のうち、仲雍が江南
ううち、ふっと、太伯、仲雍が江南
へ下ってきた頃のこと、思いを馳せたよう
に想像される。
夷山こそ、身を寄せるべきところ
これから、一体、どうすればよいのだろ
呉王

542^P-1/2
未行へ

おし いた
思い至るのか

倭人伝を認む
91P

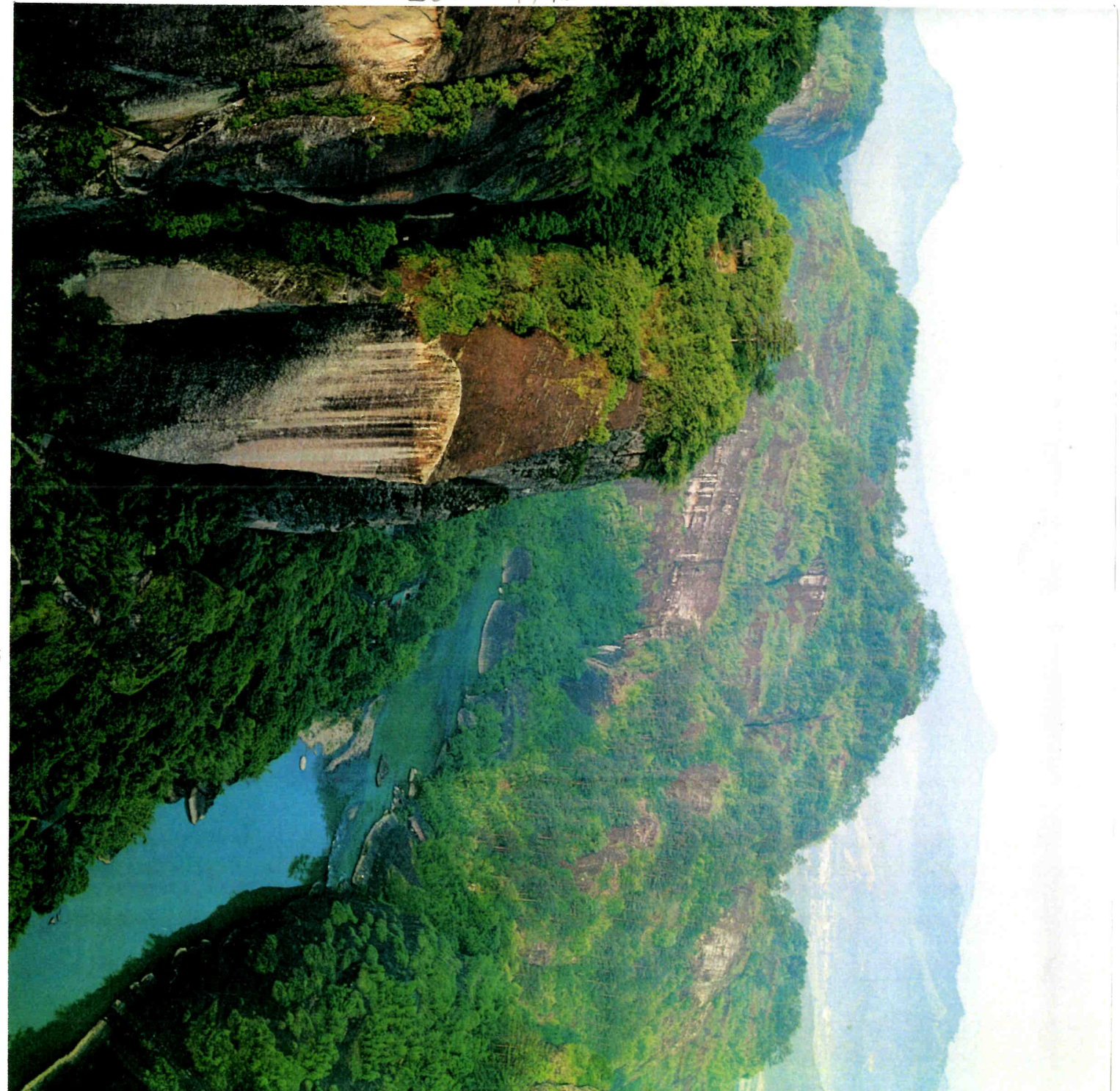
561P-2/10

と思^{おも}い定^{さだ}めたのかも知^しれない。
■とはいえ、武^ぶ夷^い山^{さん}中^{ちゆう}にある^{ある}崖^{がき}墓^ぼの年^{ねん}代^{だい}や
これらを作^{つく}った種^{しゆ}族^{ぞく}につ^ついては、異^い説^{せつ}もあるよ
うだから――今^{こん}後^ごの研^{けん}究^{きゆう}の成^{せい}果^かを待^{まち}たなけ^らば
ならない。(「倭人伝を讀む」森^{もり}浩^{こう}一^{いち}、中^{なか}公^{こう}新^{しん}
書、九一頁参照)

※

カラー
右頁/左上(4頁)に掲載。

561^P - 4/10



1486

1386

『中国の世界遺産』羅哲文・李敏 (特工対シ) 299頁参照
厚真図版110 武夷山の奇峰と清流
(Tel 03-3403-1321)

561P- 5/10

・カラー

・左頁上半分に、
はみ出して大きく
掲載下さい。

・ほんの少し、岩肌
赤味を加えて
下さい。



1364

1464

写真図版 111 九曲溪から仰ぐ玉女峰 (玉女山峰)

⑩ 299P ぎゅうきょくせい あお
TOP 03-3403-1321

『中国の世界遺産』羅哲文・李敏 エクスナレ、ジ 2012年6月29日発行 302頁参照

561 P 6/10

・カラー
・左頁の下半分に
大きく掲載
下さい。
・次頁のように
ルビをつけて
下さい。



13QG 参考

14QG

第163図 武夷山、九曲溪近傍図

* 九曲〜一曲を、ゴマにする。(見やすくして下さい)

『中国』世界遺産の旅』第4巻長江流域・華南、講談社、2005年12月1日発行、131頁参照、86

561P-7/10

HU



前頁に、
ルビをつけて
おいて下さい。
(6ヶ所)

561P-8/10

・カラー
・右頁の
上半分に
掲載

・奥の山が
消えるよ
うに下
さい。



図604
1899

88^P

132G

146G

写真図版112 武夷山脈

『中国の世界遺産』羅哲文・李敏、(株)エクスナレッジ 2012年6月29日発行 304頁参照 88

⑥612⁵ 系
 ⑥592⁵
 ⑥596⁵ 17行
 ⑥561⁵ - 9/10

「史記」上 298⁺
 ⑥590⁵ - 1/4 16行

前 1100 段末太伯
 新 493 夫差死
 627
 ちんけん 陳平臣
 「中口の史」奥付
 にも有る。

朝日新聞 平成十七年二月七日付 六甲随
 筆 陳舜臣 へ 奇岩と怪石。武夷三十六峰 へ
 中国の世界遺産 へ 羅哲文・李敏 へ 林エクス
 ナレツジ へ 二九八頁 へ 武夷山 へ 参照
 * なお、太伯の誕生（前二〇〇年よりも前）から、吳王夫差の死（前
 四七三年）までは、約六五〇年くらいとなりそうである。
 ⑥ また、史記 へ 封禅書 へ 武帝 へ の項の末尾
 近く、こう記されていいる。
 前漢第七代の武帝は、もうすでに両越（南越
 および閩越）を滅ぼしていった。
 そのころ、越で生まれた勇之という者が、
 越（の地域）には、鬼神を信ずる風習
 が御座いて、その（地の）祠では、
 鬼神があらわれ、幾たびもあらたかな靈驗が
 ありました。
 ⑥ 越王句踐（東海王揺、追って述べよ
 うに、越王句踐の後裔であらうか）は、鬼神
 を尊敬して、百六十歳の寿命を保ったのでした。
 しかし後世では、祭りを、おこたるものです
 から、後世では、早く、おとろえてしまふの

561^p-10/10

タイトル④ 42^p-1/2
長寿④ 63^p-1/2

史記上 266^p

前頁より

です
と言ったし
という。(「史記」封禅書「倭人伝」を読む
森浩一、中公新書、八五頁参照)

その昔、江南地方

(代々襲名して)

■もーかーたらで(吳・越・閩越)では、長

寿を保つ、という風習が根強く継承されてい

たのか、知らない。(「荒筋」第一編、
『長寿の秘密』参照)

*

前四七三年仁

閩中郡
 秦は「周の孝王の時に甘肅省清水県の地を占えられた小国」は、国力の増強を図り、
 強大となり、東方への侵略の歩をすすめて
 戦国七雄の一国となり、さらに秦王政（始皇
 帝）の時、韓・趙・魏・楚・燕・斉の順に六国
 を滅ぼして天下を統一した。
 前二二一年のことだった（第4表参照）閩越、現在の福建省の地
 として中国を統一したとき、秦の始皇帝は
 閩中郡を置いた。
 際には、閩侯県（魏志倭人伝に記され
 ている東冶付近）を都とする閩越王がいた。
 （「東洋史辞典」創元新社「閩越」。「岩波
 文庫」四三七〇、四四頁参照）
 もともと秦は、これらの王位を廃して君長
 にした、という。（「史記」へ東越列伝の冒
 頭参照）
 あるいは、次のような経緯があつたのかも
 知れない。
 呉国が滅亡してから後、武夷山中にひつ

①例えは先に述べた通り、
箕子朝鮮国に奪い取った衛滿は、
その国名を踏襲して

移うつった先さきの地ち名めいを冠かんする王おう名めいで名な乗のる習なわ
 かあつた✓ように見み受うけらる。

とも思われ^る。な^のに^く
 さ^そうな^{もの}な^く
 ところ^で、呉^の末^裔なら^は、
 王^でなく^く
 呉^王と^自称^すれ^ばよ

の
で
は
な
か
ろ
う
か
や

この地には、
（閩越、つまり閩中郡）の
実力者として、
際（さい）には、
（閩越王）（呼称上君長と
呼ばれた）が、
（3）「か」「う」は
「人の形式にすぎなくて、
実

(2) 前二二一年に天下を統一した秦は、
 地に閩中郡を置いた。そして、秦の郡守（郡
 の長官）がこの地域を治めた。

進出（しんしゅつ）して、閩越（いんえつ）王（わう）となつた。

そり身みをひそめていた太伯たいはくの後のちと自称いほうする者もの

47-4/5
341-3/3

47-3/5
47-4/5

史記下128
小147
劉邦(リウパウ)
漢の高祖

史記下128
564

東洋史608
↓

日(衛氏)朝鮮国と称した
・箕子朝鮮国を強奪した箕子(きし)は、海に浮
かひ、韓(朝鮮半島南端部)を攻め取つて日韓
王(王)を名のつた
という。(第二章へ箕子の南下について既
述)
②また、漢の高祖(劉邦)は、
「兄(劉仲)の子である灋(沛)を沛(江蘇省、
劉邦の出身地)に立てて日吳王(王)とし、三郡
五十三城邑(城壁で囲まれたまち)を治めさ
せた
という。(「史記」へ吳王濞列伝へ高祖本紀参照)
③さらに、孫權は、
「二二九年に国を吳と定めて帝位につき、
揚子江下流域の建業(南京)に都した。三国
時代の吳の初代皇帝である
という。(「三国志」へ孫權参照)
「蜀」(福建省の閩江流域を中べとする地方)
で王となったから、吳王でなく、閩越王と名乗つ
たのだろう。(「東洋史辞典」創元新社へ閩越参照)

ようは 次頁 10行

同文南520^P - 1/2 17分
(南539 - 2/2) 565^P
17分 ←

⑤ $590^p - 4/4$ 未
⑥ $591^p - 3/3$
⑦ 597^p

101. 561^{0-4/5}
1997
まか
ま→と 562^{0-1/5}
にはいえ -- 若(は)
けか(て) -- 若(の)は

コクヨ ケー20 20×20

次頁
から

な末裔か下前漢（初代劉邦）の五年（前
一九八）以後のある時、会稽の東冶から
東海海中の島（倭国）へ移り住んだ
というふうに考えられる。
つまり、陳寿が、
「倭人の祖先は、
『太伯でなく、夏后少
康なのだろう』
という疑念を抱いたとしても、無理からぬこ
とであつた。
■ところで、
陳寿は、
魏志倭人伝を記述する際、
『
全く信憑性のない』
と謂うという字句を削り、
「倭人は自ら太伯の後
孫に違ひない」
という強い思いを込めて、
次のように挿入し
たのだろうと想像される。
『魏志倭人伝には、
唐突にも、

和馬台99の言達
89P

前2616
この頁149
由591-3/3行
567P

全比由1835
3800

親老後43P

区切っておきたい
能知体
512

前10P

「夏后少康の子、会稽に封ぜられ、断髮文
身、以って蛟龍の害を避く。」
と記されでいる。
引き続き陳寿は「引き続き」こう書きしめたの
だった。
「今倭の水人、好んで沈没して魚蛤を捕え
て飾りと爲す。諸国の文身各々異り、或は
左にし或は右にし、或は大に或は小に、
差有り。其の道里を計るに當に会稽の東冶
の東に在るべし。」
すなわち陳寿は、倭人がたとえ自らのこと
を「太伯の後」と称してゐるにしても、
「実は倭人達は」会稽に封ぜられたという
夏后少康の子と何らかの關係がある者達なの
だろう。
（越王句踐の後裔）
と、ほぼ確信をもつて疑つていたように推察される。
そして現在も、「倭人は太伯の後である」と
という話を信じる者は、多くはないようである。
「たしかに」陳寿と同様の通常の見方をする
限り、
（ごく一般的に）

前10P

1416P

1979P

7

568 P

2人2人
混成 4849⁰

米

しかしながら我が国の祖先が自ら太伯の後
 子孫だと言っていたというのだから、この物
 語では、
 何を如何に扱っていてもその言葉
 を信じてみることにしたい。
 先祖代々言伝えていたこのへかすかな声の眞の意味を
 我々がいつと耳を敲たせて眞剣に聴き取ろうと
 努めなかつたら、一体誰が傾聴してくれよ
 うか。

我々は、ともすれば歴史書の記述のみに偏^{へん}

130(2018)12.4(火)~12.4(3回) 由545未否定するおも肯定17
 R1.5.3(金)~5.4(3回) 検討すればよい 569P
 令和元(2019)12.1(日)~12.2(3回) 二蹴元31' 1はつ782と 頭から元42'始めから
 ともか前自分か分からなくなると、すぐ「シャーマン」を持ち出す なるほど 209 者が多い 565P1行

下13%
1%

(*)

重^{ちゆう}く^くして^し考^{こう}察^{さつ}し、^{すこ}し^しでも^{でも}辻^つ褌^{ふん}が^あ合^あわ^わな^ない^いと^と
 そ^そ小^こ以^い上^{じやう}深^{ふか}く^く考^{こう}え^えて^てみ^みよ^{よう}う^うと^と固^くせ^せず、
 と^と決^けめ^めつ^つけ^けて^てし^しま^まい^いか^かち^ちで^であ^ある。
 ・ま^また^たい^いう^うま^まで^でも^もな^なく、^{ちゆう}中^{ちゆう}国^{こく}の^{れき}歴^{れき}史^し書^{しよ}は、^{にっ}日^{にっ}
 本^{ほん}の^{れき}歴^{れき}史^しに^{じゆう}重^{じゆう}点^{てん}を^お置^おい^いて^てい^いる^る訳^{わけ}で^でも^もな^ない。
 ・な^なる^るほ^ほど^ど朦^{もう}朧^{ろう}と^して^てい^いる^ると^とは^はい^いえ、
 へ^へ倭^わ人^{にん}は、^{たい}太^{たい}伯^{はく}の^{のち}後^{のち}で^であ^ある^る筈^{はず}か^かな^ない^い
 な^など^どと、^あ頭^{あたま}か^から^ら問^{もん}答^た無^む用^{よう}と^ばか^かり^りに^に一^{いつ}蹴^くして^て
 し^しま^まつ^つて、^{ほん}本^{ほん}当^{とう}に^にそ^そ小^こで^で正^{ただ}しい^いの^のだ^だら^らう^うか^かと
 ・た^ただ^だ漢^{はん}然^{ぜん}と^した^たへ^へ否^ひ定^{てい}な^など^どで^で一^{いつ}一^{いつ}一^{いつ}いつ
 ・ま^まず、^た誰^{たれ}に^にで^でも^も出^で来^きる^るや^や
 て^てみ^みて、^{どう}ど^うう^うして^{して}も^も納^な得^{とく}の^いく^く筋^{すぢ}道^{みち}が^み見^みい^い出^だた^た
 せ^せな^ない^いな^なら^ら、^{その}そ^{その}の^{とき}時^{とき}、^わ倭^わ人^{にん}か^かど^どう^うして^{して}
 日^{にっ}太^{たい}伯^{はく}の^{のち}後^{のち}に^にだ^だと^とい^いつ^つた^たの^のか^かを^を再^{さい}検^{けん}討^{とう}す^する^るこ^こ
 と^とに^にし^しよ^{よう}う^う。
 (*)

というのであれば ⑤ $567^{\circ} - \frac{3}{2} \times 45^{\circ}$ 別の観測点から西 $548^{\circ} - \frac{3}{2}$
 ⑥ $572^{\circ} - \frac{3}{2} \times 10$ やがて $n - \frac{3}{2} \times 10$ 本当に 前頁 10 年

呉国^{ゴクニ}と倭国^{ヤクニ}との深い^{ふか}絆^{きずな}
 少^{すこ}しばかり、視^し点^{てん}を^を変^かえてみようや
 も、^も一^{いっ}も^も歴^{れき}史^し上^{じやう}、実^{じつ}際^{さい}に、
 へや^へつ^つて^てき^きて^て、^そ一^{いっ}つ^つに、^に日^に本^{ぽん}の^の統^{とう}治^ち者^{しや}
 と^と一^{いっ}て^て君^{きん}臨^{りん}す^する^るこ^こと^とに^にな^なつ^つた^た
 の^ので^であ^あは^は、^そど^どう^うい^いう^う現^{げん}象^{じやう}が^が生^{せい}じ^じた^たと^と考^{かう}え^えら^ら
 れ^れよ^よう^うか^か。

かな^かなら^らず^ずや、
 へ^へ太^{たい}伯^{はく}の^の後^ご、^そ吳^ご王^{わう}の^の子^し孫^{そん}と^と自^じ称^{しょう}す^する^る者^{ものたち}達^だ
 は、^は呉^ご国^{こく}の^の伝^{でん}統^{とう}的^{てき}な^な風^{ふう}俗^{そく}習^{しゅう}慣^{かん}・^そ衣^い食^{しょく}住^{じゅう}の^の
 なら^らわ^わし^し言^{こと}葉^は・^そ文^{ぶん}字^じ等^{らう}々^々多^{おほ}く^くの^のを^をマ^マ
 東^{とう}海^{かい}の^の絶^{ぜつ}域^{いき}に^に浮^うか^かぶ^ぶこ^この^の日^に本^{ぽん}列^{れつ}島^{とう}へ
 赤^{あか}丸^{まる}ら^ら一^{いっ}た^たで^であ^あう^う、
 と^と思^{おも}わ^われ^れる^る。

二^にそ^そ一^{いっ}て^てま^また、
 へ^へ東^{とう}治^ちを^を後^{あと}に^に一^{いっ}て、^{とう}東^{とう}海^{かい}中^{ちゅう}の^の島^{しま}、^{せい}日^に本^{ぽん}列^{れつ}島^{とう}
 へ^へ移^{うつ}り^り住^すん^んだ^だ吳^ご王^{わう}の^の子^し孫^{そん}達^だは、^{せい}西^{せい}方^{ほう}に^に広^{ひろ}

$\frac{1}{3}$ 小
 吳 吳 吳 吳 吳
 ④ $1.883^{\frac{1}{3}}$

100

地名 1588° 八代郡
⑤1829°
墨針 ⑤1829°-24

百科②-2°
2290°

571°-1/8

5826°
大町357°

⑤1725° 日本語 朝鮮語・モンゴル語
マライボリネシア語族の一つなど
諸説ある。由1883°-1/3
⑤1884°-1/3

川出版社、一四二頁参照。第二十七章において詳述

は、本来へ倭人達の日常語とて、ごく一般的に使用されていたのかも知れない。
・そこで吳音は日本語の中に占める割合が非常に多く、無数といえるほど多く、
にまでも根強く広く浸透して用いられて現
いるのではなからうか。
り、ほとんどの漢字に吳音が記載されている。
「吳服」・「吳織」・「吳絹」・「吳綾」
（吳国のあや）・「吳縞」・（吳国のしま）な
どという言葉がある。
・倭人達は、吳国の衣服や織物に、多大の関
心を持っていたようだ。
「莫莖」ハ「藺草」を編んで作った「藺筵」に縁を
つけたもので、御座（貴人の席）に敷くも
の。「莫莖打」ハ「藺草」の用語が多数ある。
「藺草」ハ「肥後国八代地方の名産品と
な、お、藺草は、肥後国八代地方の名産品と
して知られている。（熊本の歴史散歩）山

次頁から

571^P-2/8

大カ³57⁷
接ぎ合^めす¹771⁷

2657^P

呉^ごから伝^{でん}来^{らい}したからいう

「呉^{くれ}楽^{がく}」
「伎^ぎ楽^{がく}」
「無^む言^{げん}仮^か面^{めん}音^{おん}楽^{がく}劇^{げき}」
の称^{しょう}。

「呉^{くれ}鼓^こ」
「呉^{くれ}楽^{がく}用^{よう}の腰^{よう}鼓^こ」
く水のつづみ

「呉^{くれ}釘^{くぎ}」
「両^{りやう}端^{たん}が鋭^{えい}く尖^{とが}って

と材^{さい}とを接^ぎ合^あめせる

「切^{きり}釘^{くぎ}のこと」

に用^{もち}いる。切^{きり}釘^{くぎ}のこと

571^P-2/8

① $1762^{\circ}-\frac{2}{3}1763^{\circ}$ かがかえのな 貴重由 $571^{\circ}-\frac{5}{6}10$ 斤
西科⑮ -45° 数大條 46° 由 $571^{\circ}-\frac{5}{6}13$ 斤 (改行)

571 P-38

「京都御所・大宮・仙洞御所」052回 大宅 12分
 天皇の常の御所 母方の 大カンの35分
 紫宸殿の西 仁寿殿 西向王の右方という。 英竹
 次々20分 → → →

前頁 657

「呉竹」ハ淡竹の異称。呉から渡来した竹の意。(写真図版 113 頁 呉竹参照)

「呉竹の台」ハ内裏清凉殿(天皇の常の居所)の前庭に呉竹を植えたところ

倭人たちの心の故郷というべき呉から渡来した呉竹は、格別に珍重され、また、祖先達の国は呉国に忘れないうちに常の居所清凉殿の前庭に植えられたものではなからうか

「呉竹寮」もと宮中であつた皇子・皇女の住まい

「呉床」ハ中国の胡床(腰掛け)にならうて作った座臥具・椅子の類を、我が国では呉床と称した

「紅」(呉藍の約。紅色。バナナの別称)極めて貴い色「呉藍」(紅)に呉の字を付したのを「ハ」かけがえのない祖先達の国は呉国を、心から思慕していたからなのだろう

「呉の椒」(生姜の古名。原産は熱帯アジアとされ、非常に好湿性で生育適温は二五度三〇度であり、発芽には一八度以上を要する乾燥をきらう)

真竹ともいう

カラー
右奥の土物。上へ大きく 1枚出し7掲載下さい。



571^P 4/8

104

1309
1406
ゴ4

写真版 113 呉竹

京都御所 大宮・仙洞御所 京都新聞出版センター 2004年10月発行 52頁参照
清涼殿前の白砂の庭に植えられた呉竹が、清らかな佇まいをみせる。

1209
ゴ4

四元振 曲 1743-2/3

おまめ 572^P-2/3
052^P

まめ豆 2092
4年大豆をいう

571 P-6/8
571 P-6/8

貴い 571 P-3/14
蚕 350 P

版 1762 P-3/3 1657

たのではななかうか。
あるいは下寒い朝鮮半島の方面からやつてきたと思
われる縄文人の子孫達。当初の弥生人の子孫
達・箕子の子孫達には、薑（生姜）・橘
（さんしょう）・蕪荷（みょうか）を食べる
習慣が無かった。橘について、追々詳述したい
い。↑↑↑（橘について、追々詳述したい）
「呉の蚯蚓」（蚕の古名）
貴重な蚕に「呉」の字を冠して愛情を注
ぎ、卯から飼育して繭を得ていたのだろう。
「呉階・呉橋」（はーごだん。階段のついで）
た長廊下で反り橋。
・荘重な雰囲気をもつ出所である。
「呉牛」（水牛の異称。呉の地に多く産し
たからいう）や「眞図版」14へ呉牛を参照
「呉汁」（水を吸って膨らんだ大豆をすり
潰した）「豆汁」（入りの味噌汁）
「呉天」（呉国の空の意）や遠い異郷の地の

前文
24

571p 7/8

・カラー
 ・左頁の上半分
 左を大きく
 はみ出して
 掲載下さい。



13QG

14QG

写真図版 114 水牛 (吳牛)
すいぎやう りうぎやう

12QG 〔桂林下流の漓江を渡る水牛〕

右つめ

107P

『中国』エミール・シュルテス 朝日新聞社 昭和41年12月20日発行 No. 163 参照

・川が中ほどで深くなっているから、水牛は農夫を背に乗せたまま泳いで渡らねばならない

107P

白川高等地団9頁リ

大カマ 357^P
小林 200^P

こと
●倭人達は、遠い祖国「吳国」の空を思いで
吳天と称したと解されるや
■「吳吟」（故郷を思うこと。故郷を恋慕
うこと）
↓
このように、「吳」「呉」という字が付された言
葉は、実に数多く有り、衣食住その他の多岐
にわたっている。
・「かも」、「吳」の字は、とりわけ倭人に
とって大切であつたと思われるものに、多
は
き
貴し。「郷愁」などの想いが込められている
のだらう、と推察される。
・ところが、こうした傾向は、例えば「越」
や「楚」などの字には見られず、「吳」
の字だからこそその特別な現象であらう、と想
ひ込まれる。